84　誌上発表

新出の古矢知白の著書『傷寒論正文復聖解　附. 異名十有五湯辨』

町　泉寿郎，清水　信子
二松学舎大学文学部，北里大学東洋医学総合研究所

【古矢知白とその著書】古矢知白（生没年不詳，名純輔，号剛斎，堂号存青堂，下総の人）は，易学に通じた江戸後期の古方派の医家である．同時代の金子景山（生没年不詳）と密接な関係があり，同一人物ともされる．著書に『症因問答』（1845年木活）・『古方括要』（江戸末木活）・『復聖正文傷寒論』（1845年刊）・『正文傷寒論復聖弁』（1846年序成，写）・『傷寒論国字復聖弁』（嘉永中版）・『傷寒論正文復聖解』（1863年刊）等がある．『復聖正文傷寒論』は易の思想によって『傷寒論』を説いたものであり，『傷寒論正文復聖解』はその注解で知白の没後刊行された．さらにそれを漢字片かな混じりの和文で詳解したものが『正文傷寒論復聖弁』で，写本で伝わる．それを知白の子知往らが校刊したものが『傷寒論国字復聖弁』である．今回，古矢知白の新出資料を佐久間洋行旧蔵資料より見出したので紹介する．

旧蔵者佐久間洋行（1916–2003，字儀卿，別号峻斎）は，千葉県茂原の医家佐久間氏の長子として生まれ，日本医学専門学校（日本医専，現日本医科大学）に学んだ医師．医業の傍ら，『傷寒論』研究で著名な漢方界の泰斗奥田謙蔵（1884–1961）に師事し，千葉大学東洋医学研究室の武藤留吉（1888–1965），和田正系（1900–1979）が中心となり，藤平健（1914–1997），小倉重成（1916–1988），石野信安（1908–1987）らが集った奥門会に参加．傷寒論の講義を受講するなど古医書を研究し，またその収集にもつとめ，自ら中川修亭『傷寒全論』，尾台榕堂『類聚方広義』等を復刊している．一方，日本医専に先んじて二松学舎に学び，生涯詩作を続けた漢詩人でもある．佐久間の旧蔵資料は，現在，二松学舎大学附属図書館に所蔵され，そのうち医学関係資料は312点．医経，本草，経脈，傷寒の中国医書古典から各種医方，処方類，また蘭方書にも及び，最も多い分野は産科・婦人科の類で全体の約5分の1，次いで傷寒論の類，薬方，処方集の類がそれぞれ全体の約6分の1となっている．ただし産科書の多さは賀川玄悦（1700–1777）『子玄子産論』（明和2年〈1765〉刊）が10点，賀川玄迪（1739–1779）『産論翼』（安永4年〈1775〉）が5点など，同一書の副本が多いこともその一因である．

【『傷寒論正文復聖解　附. 異名十有五湯辨』】新出の資料の基本的書誌事項は以下の通りである．
写本，横本2冊．外題「傷寒論正文復聖解　附異名十有五湯」．第1冊：第1丁から第13丁表まで．第2冊：第13丁裏から32丁まで．但し，第24丁表までで「傷寒論正文復聖解」は終わり（末題「傷寒論正文復聖解 下経終」），第24丁裏から第31丁裏までは「異名十有五湯辨」が合綴されている．半丁18行，各行18字．

従来知られている古矢の著述のうち「正文」「復聖」を含むものには，『傷寒論正文復聖解』（1863年刊）と『正文傷寒論復聖辨』（江戸末写）があるが，本書はそれとは異なる．古矢は『傷寒論』のうち111章を「正文」と考えていたが，本書の前半部分『傷寒論正文復聖解』は，その「正文」部分とそれに対する古矢の簡潔な注解からなる．後半部分の『異名十有五湯辨』は，『正文傷寒論復聖辨』の凡例の末に収録処方の総計を記して，「通計七十八方，内以異称為湯名者通計十五方」とあるのが参考になる．『傷寒論』「正文」部分の収載処方78方（太陽篇52方・陽明篇3方・少陽篇0方・太陰篇2方・少陰篇17方・厥陰篇4方）のうち，構成生薬名以外の「異称」で記述された次の15処方（大青龍湯，白虎湯，調胃承気湯，小建中湯，大陥胸湯，三瀉心湯，四逆湯，通脈，白通湯，救逆，抵当湯，桃花湯，五苓散，真武湯）の名称について，古矢自身の解釈を交えて解説したもので，内容的には『傷寒論正文復聖解』（1863年刊本）中に含まれる．